

説教 「悔い改めの使信」 マタイによる福音書 3:1~6 2017年6月18日

今日のテーマは「悔い改め」です。バプテスマのヨハネは「悔い改めにふさわしい実を結べ」と言いました。「実を結べ」と言われて、「ああ、そうだ、実を結ぼう」と発奮する人もいるかもしれませんが。でも、むしろ、「私にどんな実を結べるというのだろう」と、気落ちしたり、重苦しきを感じたりする人のほうが多いのではないのでしょうか。私はそうです。それにキリスト教は「信仰義認」。「行為義認」ではありません。良い行いで天国に行けるとは考えません。それで天国に行けない私だからこそ、イエス様の恵みによって、それにすがる信仰を与えられて、天国に行けることがありがたいのです。それなのに、今になって「実を結べ」といわれても、「え、話が違う」と戸惑ってしまうのではないのでしょうか。

それでもヨハネの言葉には大変厳しいものがあります。「蝮の子らよ…良い実を結ばない木はみな…火に投げ込まれ…消えることのない火で焼き払われる。」この厳しさをどう理解したらよいのでしょうか。「いやいや、それはバプテスマのヨハネの言うことであって、イエス様はそれとは違う。」ということでしょうか。けれどもそうではありません。イエス様も、ヨハネと全く同じで、悔い改めと良い行いを迫るものでした。それはこの後続く「山上の説教」でも、また十字架に向かう直前の説教でも、とても実行することが難しいような愛の教えが述べられ、それができないならば地獄の火に投げ込まれると語られているのです。

さて、このことに関して、イエス様が度々用いられた「良い木と悪い木のたとえ」があります。7章16節以下のところと、12章33節以下のところ。読んでみましょう（読む）。ここにも、ヨハネ同様、大変厳しい裁きの言葉が書かれています。けれどもよく読むと、ひとつ大切な考えがあることがわかります。皆さん、木が良いかどうかそれは見た目で見ると言っているのでしょうか。そうです、良い木かどうかを判別するには、実がなってからでないと分からない、ちょっと時間差があるということです。すぐには見えないものが大事だということですね。それが「悔い改め」です。良い実を結ぶかどうかは、良い行いをすることに気がつかっていないはだめで、「悔い改め」が真実かどうかにかかっているということです。

では、悔い改めとは何でしょうか。答えは6節です。何と書いてありますか。そうです、罪の告白です。詩編には、神様は立派な献げものは望まれない、神様が望まれるのは告白であり、打ち砕かれた、悔いた心だとあります（51編、52編）。つまり、自分の罪ある姿を余すところなく神様の前に開き示すということです。自分の苦しみを自分で解決しようとするのではなく、苦しいまま、そのままにして、神様の前に置くということです。自分のためき加減の披瀝とでも申しましょうか。これなら私にもできます。これをいかに余すところなく、いかに徹底してやれるかに、すべてはかかっているということです。

悔い改めの真実さは、それが徹底したものであればあるほど、実を結ぶには程遠いもの

と思われるのではないのでしょうか。とても良い業を行うことに通じているとは思われないのではないのでしょうか。しかし、それでいいというのです。木が良い木であるかどうかは、すぐにはわからないというのはそういうことです。イエス様は、天国に迎えられる人々は、「いつ私がそんなことをしましたか？」と問うのだと言われました。イエス様の最後の説教、25章31節からです。読んでみましょう（読む）。

私たちは、自分が良いことをしたなんてとても思えないのです。実を結ぶなんてできないと思うのです。一生懸命やっても中途半端で満足できず、良いと思ってしたこと「余計なことをした」と批判されます。心を込めて伝道しても、それが教会の発展につながるとは思えません。どう考えても先細り、お先真っ暗です。それでもいいのです。そんなぼろくずのようなわたしたちでも、そのまま神様の前に差し出せば、神様はそれを喜んでくださるし、それをを用いてくださる。それをよい実に変えてくださいます。

「悔い改めにふさわしい実を結べ。」自分のだめさ加減の披瀝。それを真実にするならば、あとは神様がやってくくださいます。おのずと、わたしたちの知らないところで、良いことをしたなんて全く自覚すらできないところで、神様はそれをよい業に変えてくださいます。